

Void Which Binds

復刊第 1 号

海外 SF 同好会「アンサンブル」

目次

二一世紀スチームパンク概観 (梶原磨墨)	1
ラファティアンの夏 (らっぱ亭とおる・ている)	10
翻訳ミリタリSFのススメ (細井威男)	12
もうひとつのブラッドベリ伝 (牧眞司)	14
絵解き相対論入門: <i>The Clockwork Rocket</i> グレッグ・イーガン (板倉充洋)	15

二二世紀スチームパンク概観

梶原 磨墨

●はじめに

こんにちは。今日は、ここ数年の英語圏スチームパンク小説について話せというこ
とで呼ばれました。すでに「SFマガジン」二〇一二年七月号の小川隆氏らによる特
集や、おなじく小川氏らによるサイト「26to50」(<http://www.26to50.com>)での特集
という、よくまとまった解説記事があるので、その補足程度と思つて気軽に聞いてく
ださい。また、最近のスチームパンクについては小説以外の動きがむしろメインなの
でそちらに触れざるを得ませんが、これは本来はアート関連の知識がある人のほうが
向いていると思いますし、間違いもあるかと思いますがご容赦ください。また、日本
の作品については、アニメや漫画、ゲームを中心として英米とは別に独自の発達を見
せているのですが、話がとっ散らかってしまうので省かせていただきます。

言い訳が長くなりました。さて、今日の話をあらかじめまとめますと、まず海外（非
英語圏を含む）でのスチームパンクというのが小説だけではないもつと大きな動きで
あり、むしろ小説はその大きな文化的流行の一部である、という全体像について。そ
の中で小説としては実際にどういうものが出ているのか、既訳・未訳を合わせて紹介
しつつ見ていきます。そのあと、スチームパンクという動きが今後どうなるか——ど
ういうものを期待したいか——、ブルース・スターリングのエッセイを紹介しつつま
とめたいと思います。

●「スチームパンク」という呼称のイメージと実態のズレ

日本のSF読者にとっては、かつての「スチームパンク」という言葉が持つイメー
ジからして、小説発祥・小説中心のムーブメントのように思われるかもしれませ
ん。しかし、現在においてはむしろ、小説からはずっと離れて一人歩きしています。

※本稿は、二〇一二年七月二八日（土）笹塚区民会館で行なわれたSFファン交流会での発表原稿を
元に、大幅に修正再構成したものです。

※文中の刊行年・公開年は原書および公開国のもの。邦訳書誌は記事末尾にまとめました。

二〇一二年現在においては、音楽・アート・ファッションなどサブカルチャー全体に
広がったある流行について、「たまたま」呼称として「スチームパンク」というラベ
ルが採用されている、と考えたほうがいいでしょう。その流行がSF界にも入つてき
て書かれているのが、最近のスチームパンク小説です。ですので今日はまず、小説以
外の全体の動きから見えていきたいと思います。

（と、本題に入る前に「ネオ・スチームパンク」という言葉について言及しておく
と、これは日本の出版社がスコット・ウエスターフェルドの『リヴァイアサン』シリ
ズ（二〇〇九）刊行にあたって独自に使用しはじめた言葉であつて、英語圏ではほ
ぼ使われていません。英語圏スチームパンク小説は八〇〜九〇年代と二〇〇〇年代以
降との間に断絶があり、中心的作家も作品群の性格も変わりますが、明確に分けて意
識されているわけではなく、どちらも「スチームパンク」と呼ばれています（もつと
も、最近のスチームパンク・ファンはそもそもK・W・ジーター、ティム・パワーズ
J・P・ブレイロックらを知らないのですが）。今回の発表では便宜上、二〇〇〇年
代以降の作品を「最近のスチームパンク小説」と呼ぶことにします。）

●二二世紀スチームパンクの源流

まず、前世紀末ごろから、小説とは関係のないところで「ヴィクトリア朝風の文化
やビジュアルの人気」「DIY志向」などの盛り上がりがありました。

前者については「ネオ・ヴィクトリアン」という言葉がひとつのキーワードになる
でしょう。これはヴィクトリア朝（一八三七〜一九〇一）と、そのつぎのエドワード
朝（一九〇一〜一九一〇）時代のデザインを現代的に再解釈し、ファッションやアートに
取り込んだ動きでした。こうしたデザインが、ゲームの『MYST』（一九九三）、『B
IOSHOCK』（二〇〇四）や映画『ワイルド・ワイルド・ウェスト』（一九九九）

などにも取り入れられるようになって、一般の若者の間でこの時代への憧れが徐々に広まっていったようで、最終的にSaloonCon(二〇〇六)というネオ・ヴィクトリアン・コンベンションが開催されるほどになります(現在では「最初のスチームパンクコンベンション」とみなされているので、すでに両者は混同されているようです)。これはヴィクトリア朝時代の上流階級のコスプレをして、舞踏会をやったりお茶会をしながら「知的」な会話を交わそう、というものだったようです「1」。ちなみに小説の世界でも、もともとヴィクトリア朝ものというサブジャンルが存在した歴史ミステリ界では十年ほど前から刊行点数が増え、二〇〇七年頃にピークを迎えたそうです。これも人気の傍証といえるでしょう(最近はまだブーム前と同水準に戻ったそうです)。

また、ネオヴィクトリアンとは別に、アメリカの場合は「ほしいものは自分でつくるのが最高」というDIY指向がもともと根強くありまして、やはり二〇〇六年に「メイカー・フェア」というコンベンションの第一回が開かれています。これは日本でも野尻抱介さんなどがよく話題にしていますね。

ほかにも要因はあると思いますが、こうした流れが融合して、参加者が自作のコスプレで着飾ったりライブをやったりして盛り上がる「スチームパンク・コンベンション」というパーティイベントが、現在のスチームパンク・シーンの中心になっています。二〇〇八年のMTVニュースが、とてもよく雰囲気をとらえていますね「2」。(上映) この映像を見ると、コンベンションが小説読者の集まりではなく、音楽・アート・ファッション・テクノロジーなどを中心にした、デジタル中心の交流、ということがよく分かると思います。

このようなコンベンションは、今では毎週のように米国内のどこかで開かれています。中でも最大規模なのは、二〇〇九年から毎年秋にシアトル周辺で開催されているSteamconです。このコンベンションでは二〇一〇年からAirship Awardという賞をファン投票で選んでいます。部門は「書かれたもの」「ビジュアル」「音声」「コミュニティへの貢献者」「その他」。こうした部門分けの大雑把さも、シーンの「なん

でもあり」な雰囲気をよく反映しているように思います。

ちなみに、こうしたスチームパンクのビジュアル要素はもう一般にも完全に浸透していて、映画『ライラの冒険 黄金の羅針盤』(二〇〇七)や『銃士／王妃の首飾りとダ・ヴィンチの飛行船』(二〇一)などでは大々的に扱われていましたね。二〇一一年にはジャスティン・ビーバーが『アーサー・クリスマスの大冒険』のPVをスチームパンク風ビジュアルでやりたりもしています(こうなるとどこがパンクなのかわかりませんが)。映像分野でのスチームパンク受容は、今後ますます進むと思います。

というわけで、小川氏が書かれているように、最近のスチームパンク小説はこういう「流行のスチームパンク・シーンへのSFからの答」[3]」だとして捉えると、すっきりしますね。

●最近のスチームパンク小説の流れと特徴

なぜスチームパンクが流行ったのかは気になるのですが、いったん置いておいて、海外SFの実作について紹介していきたいと思えます。

先ほど、中村融さんに九〇年代までのスチームパンク小説について語っていただきましたが「4」、ギブスン&スターリング『ティファレンス・エンジン』(一九九〇)以降、スチームパンクは定着せず、いったんほぼ滅びます。一九九五年にポール・ディ・フィリポの連作中編集『Seampunk Trilogy』、ニール・ステイヴンソン『ダイヤモンド・エイジ』、フィリップ・プルマン『ライラの冒険』第一部が出たりもしましたが、後者二点については「スチームパンク」という呼び方すら、当時はほとんどされなかったのではないのでしょうか。

ところが、二〇〇〇年代中盤になると急にスチームパンク小説が盛り上がりはじめ、

[3] <http://www.26to50.com/jp/review/seampunkCmm1207.html>

[1] <http://www.deborahmcastellano.com/saloncon/>
[2] <http://www.mtv.com/videos/news/280093/its-airships-pirates-and-goggles.jhtml#id=1595811>

大人向け小説を中心にアンソロジーや長篇がたてつづけに出るようになりました。ゲイル・キャリガーのYA小説《アレクシア女史》(二〇〇九)、シエリー・プリースト《ボーンシエイカー》(二〇〇九)は、もつとも大きな成功を収めたのではないのでしょうか。YAでも、大人向けほどではないですが一定の地位を築いているようです。また人気の高まりを受けて、過去の作品にさかのぼってファンによるスチームパンク認定がなされたりもしているので、現在も歴史はどんどん書き換えられている最中です。

こうした最近のスチームパンク作品の特徴について簡単に言ってしまうと、オルタネートサイエンス(飛行船、機械人間、ゴグルその他のガジェット+疑似ヴィクトリア朝風文化)×政治的背景設定(陰謀とか戦争とか)×冒険活劇「5」。言ってしまうと、とりあえずヴィクトリア朝風の世界でマッドな発明が出てくれば、なんでもスチームパンクになり得ます。そのあたりの自由さもファンにとつての魅力ですね。なんでもありなので、バチガルピ『ねじまき少女』(二〇〇九)やミエヴィル『ベルデイド・ストリート・ステーション』(二〇〇〇)のように明らかに毛色のちがう作品でさえもスチームパンクと呼ばれることがありますし、実際そうした作品はスチームパンク・ファンからも高い人気を得ているようです。

もつとも、最近ではジャンル人気を反映してか、スチームパンク・コミュニティ内ではサブジャンルの世界設定にしているようなものは「レイガン・ゴシック」というように呼びかけることもあります。ただ、細かいジャンル分けには興味がないので、今日は省略します。

●日本での邦訳例(こんなにある)

日本においては《アレクシア女史》や《リヴァイアサン》や『ボーンシエイカー』で急にスチームパンクが翻訳されはじめたように感じている方がおられるかもしれませんが、実は十年ほど前から英語圏でスチームパンクとされる作品のうちけっこうな

数が邦訳されています。ハリー・ポッターにあやかろうとしたのか、YAや児童書を中心にファンタジイとして出されたものが多いせいか、あまり知られていないようですね。とはいえ、訳されたものはわりとスチームパンクの「お作法」に忠実な作品が多いですから、いくつか読めば、現代のスチームパンクの雰囲気をつかめるでしょう(おもしろいのはジャンルど真ん中よりもむしろ周縁の尖った人たちなんですが、まあこういうエンタメもいいですよ)。

フィリップ・プルマン《ライラの冒険》(一九九五〜二〇〇〇)

映画になったので知ってる人も多いでしょう。発表当時はあまりスチームパンクとは思われてなかったんじゃないでしょうか。児童文学ですが、大人が読んでも大変おもしろいです。おすすめ。映画の続篇計画は残念ながら白紙になりました。

J・グレゴリー・キーズ『錬金術士の魔砲』上下(一九九八〜二〇〇一)

一八世紀初頭、ニュートンが錬金術を完成させた改変世界が舞台です。アメリカの発明少年ベンジャミン・フランクリンの冒険と、怪しげな薬で延命したルイ十四世が君臨するフランス宮廷内で聡明な女性科学者が出くわす陰謀が交互に展開します。惑星運行儀やエーテル・スクライバーといった小道具や脇役も魅力的で、大ネタも読み応えあり。問題はこれが四部作の一作目で、単体ではまったく完結していないこと。歴史改変部分がきちんと書き込まれるなら、続きはおもしろいのですが。

フィリップ・リーヴ《移動都市》(二〇〇一〜〇六)／《ラークライト》(二〇〇六〜〇八)

《移動都市》はご存じだと思いますが、機械都市が食い合う最終戦争後の地球を舞台にした少年少女の冒険もの。飛行船も出てくる。《ラークライト》はニュートンの発明により人類が宇宙に進出した世界の一九世紀が舞台で、少年宇宙海賊といっしょに太陽系のいろんな星を巡りながら悪い連中と戦う、小学校中学年くらい向けの話。各惑星に原住民がいたり、ヴェルヌ、ウェルズからE・R・バローズなど、なつかしの秘境惑星冒険譚の雰囲気たっぷりな佳作。三作目の邦訳がまだですが、映画化されたら出るかも？

クリス・ウッディング『魔物を狩る少年』(二〇〇一)

一九世紀後半、ドイツに戦争で負けたあと魔物があふれ出した改変世界のロンドンが舞台。主人公は魔物ハンターの少年。ある日の行事中、彼の師匠にあたるお姉さんとふたりで助けた美少女が実は、陰謀を企てる秘密組織に追われていて……というよくある展開なんですが、荒廃した旧市街に出没する猟奇殺人鬼や、放棄された地下鉄での怪物との戦いに漂う怪奇幻想風味が素敵。《移動都市》が好きな人におすすめできる、ジュブナイル冒険小説。

ケネス・オッペル《エアボーン》(二〇〇四〜〇八)

一九世紀末ごろの改変世界が舞台のヤングアダルト小説。飛行船生まれで飛行船乗りを夢見るキャビンボーイの少年と、博物学者を目指す上流階級の少女が出会い、空賊に襲われて戦ったり、不時着した南の島を探検して未知の生物の痕跡を探したりと、古き良き秘境探検小説やジュブナイル活劇の雰囲気がある。ヴィクトリア朝的な博物学・階級社会といった要素もけっこう生きています。脇役もそれぞれに魅力的(気に食わないことがあると厨房で包丁を並べてじっと眺めて心を落ちつかせる、気難しいルーミア人の料理長とか)。第二部『スカイブレイカー』は、高高度を飛ぶ幽霊飛行船の回収に挑む。第三部 *Starliner* (未訳) は、パリに建てた宇宙エレベーターで宇宙をめざす話。

ステイブン・ハント『モリー・テンブラーと蒼穹の飛行艦』(二〇〇七〜)

ちよつと時間がなくて私は読めませんでした。本国では人気シリーズで、現在六巻まで出ています。いったん文明が滅んだ後、ヴィクトリア朝ロンドンめいた世界が復活したという設定で、魔法や異種族がたくさん出てくる。日本では一巻しか出ていないのは、単行本七〇〇ページの分厚さにアニメ風の表紙をつけたうえで「ヘビー・ファンタジー」と銘打った、というちぐはぐな売り方も一因かも。

このほか、ジャンル・ファンタジーの中にもスチームパンクの文脈で評価されている作品があります。訳されているものではナオミ・ノヴィク《テメラリア戦記》(二〇〇六〜)、スザンナ・クラーク『ジヨナサン・ストレンジとミスター・ノレル』(二〇〇四〜) など。ジャスパー・フオード《文学刑事サーズレイ・ネクスト》(二〇〇一〜) はた

ぶんスチームパンクではないのだけど、奇天烈な作品で面白い。

●未訳の注目作

まずは長編から。ジャンルどまんなかを外したものが面白そうです。

Mark Hodar (マーク・ホダー) *Burton&Swimburne* 三部作 (Pyr, 2010-12)

The Strange Affair of Spring Heeled Jack, The Curious Case of the Clockwork Man, Expedition to the Mountains of the Moon の三冊。ヴィクトリア女王が暗殺されてしまった一九世紀。主役はリチャード・バートン(『千夜一夜物語』を訳した人で、語学の天才で剣術の達人で探検家という実在の変人)と詩人アルジャーノン・スウィンバーンのコンビ。ダーウィンやナイチンゲールはじめ実在の人物が入り乱れるが、ただのネタじゃなくてしっかり改変の意味を考えてあります。第一作は、伊藤計劃『ハーモニー』がディック賞次点だった年の受賞作。東京創元社より刊行予定。

ラヴィ・テイドハー *The Bookman* 三部作 (Angry Robot, 2010-12)

The Bookman, Camera Obscura, The Great Game の三冊。アメリカゴ・ヴェスプッチがカリブ海から連れ帰ったトカゲ人間がイギリスを征服した後の一九世紀が舞台。モリー・アーティが首相でアイリーン・アドラーが警視、火星探査計画が進んでいるという世界で、ブックマンと呼ばれる神出鬼没のテロリストと、極秘計画を進めるトカゲ人間たちの思惑が交差します。SFマガジン掲載の「ストーカー・メモランダム」は同じ世界が舞台。

Robert Jackson Bennett (ロバート・ジャクソン・ベネット) *The Company Man* (Orbit, 2011)

フィリップ・K・ディック賞次点、エドガー賞受賞。改変世界の二〇世紀初頭アメリカを舞台に、架空の大都市に君臨する大企業に雇われた主人公の探偵が、同社組合員の殺人事件調査を通じて企業が持つオーバーテクノロジーの秘密に迫っていきます。こういう作品もスチームパンクと呼ばれることがある、という例として。

ハンヌ・ライアニエ *Quantum Thief* (Gollanz, 2010)

三部作予定。遠未来の太陽系が舞台にした、いわゆるシンギュラリティもの。ジャンル・スチームパンクではありませんが、舞台となる社会設定や冒険活劇のプロットは、スチームパンクを多分に意識しているでしょう。ガジェットを惜しげもなくぶちまけた破天荒な活劇で、しかもすごいSF的展開も待ち受ける。〈新☆ハヤカワ・SF・シリーズ〉から『量子怪盗』(仮題)として本年十月邦訳刊行予定。

そのほか、ジャンルのどまんなか路線でいくつか言及すると、クリス・ウッディン *Tales of Kery Jay* シリーズ (Gollanz, 2009-2011) は、架空世界を舞台に空賊が活躍する話。ティム・エイカーズ *Burn Cycle* シリーズ (Solaris, 2009-) は、やはり架空世界の蒸気都市を舞台に、ソード&ソーサリーの要素を取り入れたものらしい。

中短篇に目を向けると、雑誌掲載作品のほか、書き下ろしアンソロジーがたくさん出ています。サブジャンルをさらに細分化したテーマアンソロジーもあって、ゴーストストーリーものやレズビアン・スチームパンクアンソロジーというものも。ジェフ・ヴァンダーミアは八〇年代と現代をつなぐような再録ものも編集しています。

ただ、ヒューゴー賞など読者投票で上位になるタイプの作品はいまのところ、型どおりの話ばかりでつまらないものが多いですね。もっと渋いところでやっている作家に面白いものがあります。以下は自分がつまみ読んだものからのオススメ。

マイケル・スワンウィック & アイリーン・ガン *"Zeppelin City"* (Tor.com, 2009)

架空の三〇年代、ガラス筒入りの脳でできた連結知性「ネイキッド・ブレインズ」が支配する大都会を舞台に、発明少女と凄腕女性パイロットとボンクラ革命青年が活躍する航空冒険活劇。これは自分で訳してありますが、諸事情でお蔵入りになっています。

マイケル・スワンウィック *"The Mongolian Wizard"* (Tor.com, 2012-)

魔法が存在する一九世紀中盤らしき改変世界の欧州が舞台の、全六話予定の連作短篇(二〇一二年七月より開始)。ある国際会議の裏に潜む陰謀をきっかけに、一見お調子者の凄腕魔術師と青年将校が出会う。今後期待できそうな渋い雰囲気。

ティム・エイカーズ *"A Soul Stitched to Iron"* (*The Solaris Book of New Science Fiction: Volume Three*, 2008)

この人自身はすでにスチームパンク作家として人気。この短篇は遠未来の疑似ヴィクトリア朝世界を舞台にしたエージェントもの。ベタではありませんが、地下水道でリボルバーを使った銃撃戦をやったり、出てくるガジェットにビジュアル的なセンスの良さを感じます。

ポール・コーネル *"Jonathan Hamilton"* シリーズ (2008-)

連作短篇で、現在第三話まで書かれている。一八世紀末くらいの力関係のまま欧州列強が太陽系内に進出したらしき世界が舞台で、主人公のエージェントが勢力均衡のために命じられるがまま汚れ仕事に手を染める。ガジェット連発と語感重視のはたたりが効いた文章、古典的スパイものへのオマージュは、いかにもコミック原作出身らしいというべきか。一作目 *"Catherine Drewe"* はつまらないが、二作目 *"One of Our Bastards Is Missing"* が二〇一〇年ヒューゴー賞候補、三作目 *"The Copenhagen Interpretation"* が二〇一二年英国SF協会賞を受賞していて、内容も徐々にレベルアップしている。単なる雰囲気だけの作品に終わる可能性もあるが、国際関係設定の活かしかたや、SF設定の明かしかた如何で今後化けるかもしれない。

●ノンフィクションの参考作

ちよつと話がずれますが、この時代に興味が出たらこんな本もどうぞ。というか、量産タイプのマンネリ作品を読むくらいなら、ノンフィクションのほうが面白いのでは。

オーウェル *『パリ・ロンドン放浪記』*

ジャック・ロンドン *『どん底の人々』*

どちらも、二〇世紀初頭にロンドン貧民街での生活を体験した筆者による実録。個人的には等身大でユーモアのあるふれたオーウェルの作品のほうがオススメだが、ジャック・ロンドンのジャーナリスト的な貧困観光記述も非常に面白い。

ステイブ・ジョーンズ《恐怖の都ロンドン》三部作

友成純一訳、ロンドンの様々な歴史的逸話を集めたエッセイ集。特に二巻目の『鍵穴から覗いたロンドン』はヴィクトリア朝の奇妙さが際立つ。

トム・スタンデージ『ヴィクトリア朝時代のインターネット』

松田裕之『ドレスを着た電信士マ・カイリー』

テクノロジーがいかに一九世紀の人々の生活を変えたか、という視点で。

●なぜスチームパンクが人気を得たのか？

さて、ここで前の疑問に戻りますが、それではなぜ、こうした疑似ヴィクトリア朝を舞台にした冒険活劇に人気が集まったのでしょうか？

レヴ・グロスマン（作家／ジャーナリスト）やジョージ・マン（編集者／作家）らは、「科学が説得力ある幸福な未来像を提示できなくなった現代において、自分で仕組みを理解できるテクノロジーに対する郷愁や、明快な未来像に向けて前進していた時代に対する憧れが強まった」という仮説を示しています。たとえば iPhone のように、一見して機器の役割を想像できず中を開けることもできない現代の機械に対する反発が元にあるのだろう、という推測です。

しかし、一方でルー・アンダーズ（編集者）のように、「テクノロジーに対する郷愁というのは後付けの理屈だろう。iPhone だろうと蒸気機関だろうと仕組みを理解できない点では同じ。実際には、スチームパンクは YA のような冒険活劇を読みたい大人にとって都合がいいだけでは」という人もいたり。諸説紛々ですね [6]。

●スチームパンクの今後

最初に述べたように、スチームパンク・コミュニティはファン・フィクション（同

人）的なノリで、みんなを着飾ってパーティーを楽しむ、という雰囲気支配しています。合言葉はマナー、団体によっては宗教や政治の話題そのものが御法度だったりもします。

そうした志向を受けて、小説のほうもマッドな発明家や科学者、上流階級サロンの洒落て知的な雰囲気、ワクワクドキドキの冒険プロット、元氣いっぱいキャラクターに重点を置く傾向が強いです。しかし、スチームパンク小説が輝く真鍮や革の小道具が代表するような明るく楽しい雰囲気をそうやって押し出す一方で、実際のヴィクトリア朝の暗い面（衛生、公害、階級分化、児童労働、差別問題、帝国主義など）はほとんど取り上げられませんし、史実との絡みもせいぜいが名称やキャラクターの表層的な引用に留まりがちです。

かつての『ティファレンス・エンジン』は、現代に直接つながる要素が出そろった時代として産業革命期やヴィクトリア朝時代を捉え、その膨大な史実を再検討しつつ重ねていつて現代社会を別角度から照射する、という試みを行なっていました。現在はそのような「重たい」話は忌避されるようです。しかし、スチームパンク・コミュニティがそうやって、あくまで都合のよい「ネタ元」としてしか史実を扱わないのであれば、小説としては一見自由に想像力を羽ばたかせているように見えながら、その実はアイデアのリサイクルに陥ってマンネリ化し、衰退することになるでしょう。

実際この六月には、小川さんが *2650* で紹介されていますが [7]、最近の動向に違和感を覚えていたスチームパンク作家ラヴィ・ティドハーがツイッターで「スチームパンクは善良な人々のためのファシズムだ」と呟いたことで、一部のスチームパンク・ファンから不買宣言を含む猛反発を喰らった、という件がありました。おもしろいのは、この件を受けてティドハーが新作短篇「A Lexicon of Steam Literature of the Third Reich」（第三帝国におけるスチーム小説用語辞典）を、自分のブログで公開したことです。ナチスドイツが勝利した世界での典型的スチームパンクは「ビスマルク時代やドイツ人の理想郷の世界ヒュペルボレアを舞台に、アリア人ヒーローが大活躍して、アインシュタインら悪辣なユダヤ人マッドサイエンティストや黒人・ジプシーなどの劣等人種が重なる陰謀を粉砕する」話になる……という記述は、最近のスチームパンクに対するイスラエル出身作家ならではの痛烈な皮肉。それに加えて、こ

[6] マン・アンダーズの発言は *The Steampunk Bible* p.69 より要約。グロスマンの主張は "Steampunk: Reclaiming Tech for the Masses" (<http://www.time.com/time/magazine/article/0,9171,945343,00.html>) 46 頁参照。

[7] http://www.2650.com/jp/review/steampunkCmm_1207.html

のジャンルにおけるプロットやガジェットやキャラクターの使い回し・マンネリ化に対する皮肉にもなっています [8]。

この他にも、現代の社会・科学技術を描く手段のひとつとしてスチームパンクを捉えようとする「パンク」な一派も存在するようです(ウェブジン *Steampunk Magazine* など)。SFマガジンで紹介されたのはそういう尖った作家たちの作品であり、応援したいですね。

●スチームパンクをどう捉えるか

最後に、と言つてもちよつと長いですが、ブルース・スターリングのアジテーション・エッセイ「9」を私訳したのから、一部を抜粋紹介したいと思います。これは二〇〇八年にオランダで開かれたスチームパンク・コンベンションに寄せたもので、ジェフ・ヴァンダーミア編集の優れたスチームパンク概説書 *The Steampunk Bible* (Abrams Image, 2011) にも抄録されています。このエッセイの中でスターリングは、小説から離れたサブカルチャー全般の運動としてスチームパンクを捉えつつ、全世界に広がるアート&テクノロジーの総合運動としての側面に、新たな可能性を見ようとしています。

スターリングはまず、スチームパンクを通じて同じ趣味の人々と交流すること自体はいったん肯定してみせた上で、こう呼びかけます。

「スチームパンクに参加している人々の九割は、着飾ったコスプレやサブカルチャーのお祭り騒ぎを楽しんで満足するだろう。

しかしひよつとしたら、きみは残り一割の厄介者のほうかもしれない——た

[8] テイドハー公式ブログ(二〇一二年六月二十五日付の記事“Fascism for Nice People” (<http://lavietdhar.wordpress.com/2012/06/25/fascism-for-nice-people/>))に、前述の発言の経緯説明とあわせて掲載。テイドハーはその後のツイッターのアカウント (<https://twitter.com/lavietdhar>) でスチームパンクからの撤退を示唆しています(二〇一二年八月二十六日の発言、まあ冗談かもしれませんが)。

[9] <http://2008.gogobou.nl/thema/>

だシーンを追うだけでなく、シーンをみずから作りだす連中だ。率直に言おう、いまのスチームパンク・シーンにおいていちばん重要(ヘビー)なやつらは、「スチーム」にそれほど入れこんでいない。いちばんヘビーなやつらは、「パンク」のほうに入れこんでいる——とくに、パンクが持っている「ドウ・イット・ユアセルフ」志向と、文化をこぎれいにパッケージ化した製品にして売ろうとする心が死んだ巨大企業から、生産手段をとりもどそうとする決意に。」

スターリングは、産業革命とグローバル化によって人々の手から生産手段が奪われた一九世紀を、巨大資本があらゆる文化を市場論理のもとに扱おうとする現代とパラレルな状況として捉えているようです。その上で、そうした状況に対する反発としてヴィクトリア朝時代に生まれた運動と、現代のスチームパンクを接続してみせます。

「いまのスチームパンクは、SF的ひねりを加えた歴史パステイシユを指す言葉ではない。なぜなら、現在のスチームパンクにおいて小説が果たす役割は(興味深いものではあるが)それほど大きくないからだ。スチームパンクがいま人気を得るようになったのは、それがもはやフィクションのみに留まらないからだ。スチームパンクは国際的なデザイン・アンド・テクノロジー活動だ。スチームパンクとは二一世紀のある側面に対する、カウンターカルチャー的なアーツ・アンド・クラフツ運動なんだ。

こういう考えにワクワクするなら、ジョン・ラスキンの『ゴシックの本質』という短いエッセイを読むといい。多くのまちがいを避けることができるだろう。ラスキンはもともと蒸気時代における、もっとも偉大なデザイン批評家だ。[……]

ラスキンは非常に影響力のある重要なエッセイを書き、世界を変えた。そして、ラスキンがエッセイで書いたことはすべてまちがっている。そこに書かれたアイデアはうまくいかない。過去も現在も未来にも、決してだ。ラスキンが示した精

神にもとづいてラスキンが描いたようなことをしたら、きみはおしまいだ。

しかしだ。もしきみがスチームパンク精神の元でそれらに挑戦するならば、満足いく結果を残せるかもしれない。現代のスチームパンクスは、ラスキンが想像もしなかったようなクリエイティブなツールと手法をたくさん身につけている。「……」成功するスチームパンクスは、ラスキンのような反工業主義（アンチ・インダストリアル）ではない。彼らはデジタル・ネイティブであり、脱工業主義（ポスト・インダストリアル）なのだ。これが意味するのは、スチームパンクスは彼ら独自の、新しい失敗を犯せるってことだ——もし、過去に犯された失敗について、それらをくり返さない程度にきちんと理解していれば。」

そして、先人たちと同じ轍を踏まないように過去を学べ、と主張します。

「スチームパンクが持つ重要な教訓というのは、過去に関するものじゃない。ぼくらが生きている現在の不安定さや陳腐化に関する教訓だ。ぼくらが毎日そこからじゅうで目になっているたくさん品の品物やサービスは、どれも長続きするはずのない（アンサステナブル）ものばかりだ。『風と共に去りぬ』で描かれた邪悪な奴隷制経済のように、確実にすべて消え去るだろう。そしてあとから振り返れば、シルクハットやらクリノリンやら、幻灯機やらゼンマイ自動人形やら、アブサンやら紳士用ステッキやら紙ロールで動く自動ピアノやらと同じように、どれもこれも時代遅れの奇妙なしろものとしか思えなくなるだろう。」

ぼくらはテクノロジカルな社会そのものだ。洒落て見えるゴシックなファッションや、すっかり役立たずになった時代遅れのテクノロジーを墓から掘り起してきて弄ぶときのぼくらは、ひそかに自分たち自身のテクノロジーの死を準備しているんだ。スチームパンクがいま人気なのは、ぼくらのいまの生き方がじつはもう滅んだも同然だったことに、みんな知らず知らず気づいているからだ。ぼくらはみんな夢遊病みたいに生かされている。強欲で頭が凝り固まっていて、強大

な権力を抱えこんだ年寄りどもに人生を奪われ、死人みたいに生きるよう強制されている。スチームパンクというのは、こういう真実をコピーするのにぴったりの手段だ。

葬儀の主役は死者だ。でも死者は、まわりでなにが起こってるかなんて知ったことじゃない。葬儀というのは、生者のための祭典だ。

そして、スチームパンクというのは葬儀なんだ。スチームパンクというのは過去という死者から、ぼくらを楽しませてくれるような部分「……」だけを都合よく拾ってくる、一大ページェントだ。陰鬱だったり、気味悪かったり、醜かったり、不快だったり、恥ずべきものだったり、本当に悲惨だったりする側面は見せないようにするページェントだ。でも——、死者を墓から起こそうしたら、死者のほうはこっちの見たくない荷物を勝手に持ってくるもんだぜ。

「……」たとえばぼくらが、この危なっかしい現在に目をふさいで、望みどおりの過去で周囲を覆いつくして安心したとしても、そういう意図的な行為そのものによってぼくら自身の未来は変わってしまうだろう。そういう行為は、すでに試みられたことだ。何度となく。だからしっかりと覗きこめ、おじけづくな、すべてはもう歴史に記録されている。つまり——、自分自身のまちがった幻想に立ち向かう勇気がないのなら、死んだ連中のマネなんか絶対にするんじゃない。

過去というのはある意味で、すでに起こってしまった未来なのだから。」

コスプレや音楽を楽しもうと集まった若者に対し、こういう褒め殺しの厳しいアジテーションをぶつけるのは、いかにもスターリングらしいと言えまじょうか。

●最後に

日本での英米スチームパンク紹介はまだまだ始まったばかりです。スチームパンク

作品をもつばらガジェット感やノスタルジーの面から楽しむのも、ひとつの楽しみ方でしょう。そしてたぶん、人気になるのはそういう方向だと思えますし、すでに兆しもちらほら見えています。ただ私としては、スターリングの提示したような問題に立ち向かう作品が（海外のみならず日本からも）出てくればいいと思います。スターリング自身は今のスチームパンクに対して、小説ではなく二一世紀版のアーツ・アンド・クラフツ運動的な面に可能性を見ているようですが、個人的にはできれば小説のほうで、キース・ロバーツ『ハヴァーヌ』（一九六八）や『ディファレンス・エンジン』に匹敵するような傑作の出現を期待したいですね。

なお、今回の話のネタ元としてはおおむねジェフ・ヴァンダーミア編集の *The Steampunk Bible* と、Tor Books という SF & FT 出版レーベルが運営しているウェブジン *Tor.com* のスチームパンク特集記事、各種アンソロジーの序文などを参考にしました。特に *The Steampunk Bible* はイラストや画像もたくさん載っていて眺めるだけでもけっこう楽しいので、興味があればぜひ読んでみてください。ご清聴ありがとうございました。（了）

●邦訳書誌情報※本文登場順。判型・版元が複数ある場合は最新のものを優先

- ・スコット・ウエスターフェルド『リヴァイアサン』小林美幸訳、新☆ハヤカワ・SF・シリーズ、二〇二二年
- ・スコット・ウエスターフェルド『ベビモズ』小林美幸訳、新ハヤカワ・SF・シリーズ、二〇二二年
- ・ギブソン&スターリング『ディファレンス・エンジン』土下 黒丸尚訳、ハヤカワ文庫SF、二〇〇八年
- ・ニール・スティーヴンソン『ダイヤモンド・エイジ』土下 日暮雅通訳、ハヤカワ文庫SF、二〇〇六年
- ・フィリップ・ブルマン『ライラの冒険1 黄金の羅針盤』土下 大久保寛訳、新潮文庫、二〇〇三年
- ・フィリップ・ブルマン『ライラの冒険2 神秘の短剣』土下 大久保寛訳、新潮文庫、二〇〇四年
- ・フィリップ・ブルマン『ライラの冒険3 琥珀の望遠鏡』土下 大久保寛訳、新潮文庫、二〇〇四年
- ・フィリップ・ブルマン『ライラの冒険4 血鬼と戦』川野靖子訳、ハヤカワ文庫FT、二〇二二年
- ・ゲイル・キャリガー『アレクシア女史、倫敦で吸血鬼と戦』川野靖子訳、ハヤカワ文庫FT、二〇二二年
- ・ゲイル・キャリガー『アレクシア女史、飛行船で人狼城を訪』川野靖子訳、ハヤカワ文庫FT、二〇二二年
- ・ゲイル・キャリガー『アレクシア女史、欧羅巴で騎士団と遭』川野靖子訳、ハヤカワ文庫FT、二〇二二年
- ・ゲイル・キャリガー『アレクシア女史、女王陛下の暗殺を憂』川野靖子訳、ハヤカワ文庫FT、二〇二二年
- ・シェリー・ブリースト『ポーンシェイカー』市田泉訳、ハヤカワ文庫SF、二〇二二年
- ・パオロ・パチガリ『ねじまき少女』土下 田中一江・金子浩訳、ハヤカワ文庫SF、二〇二二年

- ・チャイナ・ミエウイル『ベルデイド・ストリート・ステーション』土下 日暮雅通訳、ハヤカワ文庫SF、二〇二二年
- ・J・グレゴリー・キーズ『錬金術士の魔砲』土下 金子司訳、ハヤカワ文庫FT、二〇〇二年
- ・フィリップ・リーウ『移動都市』安野玲訳、創元推理文庫、二〇〇六年
- ・フィリップ・リーウ『掠奪都市の黄金』安野玲訳、創元推理文庫、二〇〇七年
- ・フィリップ・リーウ『氷上都市の秘宝』安野玲訳、創元推理文庫、二〇二〇年
- ・フィリップ・リーウ『ラークライト』松山美保訳、理論社、二〇〇七年
- ・フィリップ・リーウ『スタークロス』松山美保訳、理論社、二〇〇八年
- ・クリス・ウツェイニング『魔物を狩る少年』渡辺庸子訳、創元推理文庫、二〇〇五年
- ・ケネス・オツベル『エアボーン』原田勝訳、小学館、二〇〇六年
- ・ケネス・オツベル『スカイブレイカー』原田勝訳、小学館、二〇〇七年
- ・ステイブン・ハント『モリー・テンブラーと蒼穹の飛行艦』富永和子訳、エンターブレイン、二〇〇七年
- ・ナオミ・ノヴィク『テメラア戦記1 気高き王家の翼』那波かおり訳、ヴィレッジブックス、二〇〇七年
- ・ナオミ・ノヴィク『テメラア戦記2 翡翠の玉座』那波かおり訳、ヴィレッジブックス、二〇〇八年
- ・ナオミ・ノヴィク『テメラア戦記3 黒雲の彼方へ』那波かおり訳、ヴィレッジブックス、二〇〇九年
- ・ナオミ・ノヴィク『テメラア戦記4 象牙の帝国』那波かおり訳、ヴィレッジブックス、二〇二二年
- ・スザンナ・クラーク『ジョナサン・ストレンジとミスター・ノレル』1~3 中村蓮訳、ヴィレッジブックス、二〇〇八年
- ・ジャスパー・フォード『文学刑事サーズアイ・ネクスト1 ジェイン・エアを探せ』田村源一訳、ヴィレッジブックス、二〇〇五年
- ・ジャスパー・フォード『文学刑事サーズアイ・ネクスト2 さらば 大鵬』田村源一訳、ソニーマガジンス、二〇〇四年
- ・ジャスパー・フォード『文学刑事サーズアイ・ネクスト3 だれがゴドーを殺したの?』田村源一訳、ソニーマガジンス、二〇〇七年
- ・ジョージ・オーウェル『パリ・ロンドン放浪記』小野寺健訳、岩波文庫、一九八九年
- ・ジャック・ロンドン『どん底の人ひと』ロンドン1902』行方昭夫訳、岩波文庫、一九九五年
- ・ステイブ・ジョーンズ『恐怖の都・ロンドン』友成純一訳、ちくま文庫、一九九四年
- ・ステイブ・ジョーンズ『鍵穴から覗いたロンドン』友成純一訳、ちくま文庫、一九九五年
- ・ステイブ・ジョーンズ『罪と監獄のロンドン』友成純一訳、筑摩書房、一九九七年
- ・トム・スタンデン『ヴィクトリア朝時代のインターネット』服部桂訳、NTT出版、二〇二二年
- ・松田裕之『ドレスを着た電信士マ・カイリ』朱鳥社、二〇〇九年
- ・キース・ロバーツ『ハヴァーヌ』越智道雄訳、ちくま文庫、二〇二二年
- ・キム・ニューマン『ドラキュラ紀元』梶元靖子訳、創元推理文庫、一九九五年

ラファティアンの夏

らっぱ亭とおる・つるる

「長らくのご無沙汰。どうも、らっぱ亭とおるです」
「ているでーす」

「いやあ、最近は何でさーすケットですーとか、SF漫才に新キャラが登場したりして、あたしにも緊張なあかんなあ」

「そやけど、理山貞二はんも学生時代にラファティのSF詩『The Stranger from Beyond the Sky』の翻訳にトライされたそうで、これはもうわたらの軍門に下ったってこっちゃな」

「なんでやねん。まあ、ラファティアンが活躍するのはいいこっちゃ。創元SF短編賞関連では、坂永雄一はんの『さえずりの宇宙』。とっぱちからラファティの引用から始まってワクワクものでしたなあ。坂永はんには『もしオクラホマ州の中年の電気技師が伊藤計劃の『ハーモニー』を読んだらあるいは、忘れた翼』なんてコアなラファティアンも吃驚のオマージュー作もありました」

「国書の樽本はんのツイートみたらあの稲生平太郎先生も『第四の館』を原書で読んであったそうで、いやあラファティアンが文壇を牛耳るのも遠い日のことやないですなあ」

「大袈裟やなあ。まあ、国書で復刊予定の『何かが空を飛んでいる』なんて、ヘフォーティアン—ラファティアン—必読！ ですが」

「なんか影響されてますが、まあどっちに収束してもおんなじような。しかし、大幅増補ってことは、当然『また、石灰岩の島々も』とか、まるまる一章さいて紹介されるんやろなあ。期待してまっせ！」

「いやあ、ラファティアン狂喜のニュースが続々と入ってくる最近の状況からみたら、何があっても驚かへんなあ。今年はインディアン・サマーならぬラファティアン・サマー、ラファティアンが神はんから勝ち取ってきた計算外の夏やったんかもしれんなあ」

「ハヤカワ文庫SFから短篇集『昔には帰れない』、国書刊行会から初期の傑作長篇『第四の館』、そして青心社から後期の集大成的な長篇『蛇の卵』(仮)と、年内になんと三作出る可能性があるんやなあ。さらにローカスが全版權を買い取って、未刊行作がどっさりみつかった、と。柳下毅一郎はんもお待ちかねのイルカ小説やら、『七日間の恐怖』のウイロビー一家ものの短篇やら、いやあぞくぞくしますなあ」

「さらに、ラファティ研究家アンドリュー・ファergusンはんによれば、再来年のラファティ生誕百周年にあわせてワールドコンでラファティ祭りが予定されているそうな」

「二〇一四年度ってことは、ロンドンが名乗りをあげてますか。しかしラファティ企画だけ裏ロンドンで開催されたりして」

「アンドリューはんはラファティの版權問題でローカスとの間を取り持ってくれたりして、あたしら日本のラファティアンもお世話になっとるんや。鋭意編集集中のラファティについてのエッセイ集には日本からの寄稿も予定されているそうで、活躍が楽しみな若手ラファティアンの筆頭やな」

「それで、ラファティの集大成的な長篇『蛇の卵』(仮)ってのは、いったいどんな話なんや」

「まあ、あのラファティの集大成なんで、一言では難しいなあ。とりあえず、記者の井上央はんのお言葉を紹介しましょうか。本作はラファティが諸作でこだわってきた様々なテーマを、集大成のごとく一つのコンパクトな長篇の中に投げ込んだかのような趣さがあります。『悪魔は死んだ』に代表される旧人類・新人類テーマ、『トマス・モアの大冒険…パーストマスター』のユートピア・終末論テーマ、『イースターワインに到着』の機械知性テーマ、『地球の礁脈』(仮)の恐るべき子どもテーマ(ついでに言えば『宇宙舟歌』の船乗りテーマ?) などなど。そのすべてが一堂に会しているだけでなく、それぞれの関係、ラファティ世界全体の中でどんな位置にあるかが俯瞰できるかのような仕上がりです。ただそれだけでなく、私がこの一作に強く惹かれるのは、ダークな面が強調される作品も多い中、本作では明るい詩情が基調になって全体を覆っているからかもしれせん。以上、これはもう、ラファティアンは刮目して待つべしって感じですかあ」

「おおお、これは出るまでに予習しておきたいなあ。って、おおかた絶版ですがな。ラファティアン・サマーが続いているうちになんとか復刊して欲しいですなあ」

「いやあ、サンリオの二長篇はともかく、『つぎの岩につづく』と『どろぼう熊の惑星』を切らせているとは何事か、と某社を小一時間問い詰めた」

「セツキョー、セツキョー」

「あの名作、『 Σ の日々、藁の日々』も読めないとは、責任者でてこーい！」

「なんか変な変換されてますなあ。それに漫才キャラ変わつとるがな」

「それはさておき、『蛇の卵』の舞台となるのは“Floating World”、これは日本の「浮き世」にちなんだそうですが、本当に浮かんでいるのがなんともラファティ。例によってユートピアだと思ったら血なまぐさいディストピアだったりもするのはいつも通りですな。タイトル *Serpent's Egg* は冒頭に引用されるシェークスピア『ジュリアス・シーザー』からで、世界をも変えるスーパー・メガ・十歳児たちは、果たして孵る前に殻ごと潰さねばならない毒蛇の卵なのか!? ってお話。この世界では、『他人の目』のごとく世界を異なる観点から見ることにより新たな発展をもたらすため、様々な「実験」が行われているんや。それは人間や喋る動物やエピクトみたいな機械知性の子供を三人一組で育てて、十歳になるまでに失敗、すなわち世界に危害をもたらす毒蛇の卵とわかつたら抹殺されるんやな」

「スーパー・メガ・十歳児の三人組ゆうたら、パタリロ、ヨタリロ、マツタリロみたいなもんか」

「いやあ、キャラは似たようなもんかもなあ。あいつらやったら、即刻抹殺対象になりそうやけど、返り討ちにしようやなあ。最初に登場するアンファンテリブルなスーパーメガ・ガキどもは、試験管ベイビーの天才少年とエピクト風コンピューター少女とガーゴイル面のアウストロ風猿人のトリオや。これに、パイロキネシス少女やプレコグ・ニシキヘビっ娘、ミステリマニアの熊っ娘、母象の子宮の中から胎動でコンタクトする天才象っ娘などが集結して一ダースのスーパー・メガ・ガキ軍団になるんや」

「うわあ、萌え要素たっぷりやなあ。青心社も出版にあわせてラノベ・レーベルつくらなあかんわ。さあ、おまいら萌える準備をして待つべしっ！」

「誰に言うとするんや。しかし、ツイッターで『メイン・ヒロインは十歳のメカ美少女』って呟いたら、即座に北野勇作はんから『ちえっ、カメ少女じゃないのか』とリプライあつて笑うたなあ」

「ぶれませんか。さすが日本の椋鳩十」

「しかし、カメ少女は登場しませんが、カメの舌の裏側に刻まれた世界の秘密なんてのも出てくるんで、カメ者も必読ですなあ。そして北野勇作はんも、『だいたい世界の秘密に亀はつきものですからね』と太鼓判押ししてくれたなあ」

「これなら『かめくん』リニューアルにあわせて、『へびたまくん』ってタイトルつけて並べたら売れますなあ」

「まあ『第四の館』も世界の覇権を巡って象徴的なニシキヘビとヒキガエルとアナグマとハヤブサが戦う話やし、これはもうオクラホマの椋鳩十の称号をあげましょう」

「動物ものといえば、西海岸の椋鳩十ことキジ・ジョンソンも活躍してますなあ。名前からしてオオカミなジョン・ウルフ、熊が火を発見したテリー・ビッスン、みっともないニワトリのハワード・ウォルドロップ、ネコサーカスのイアン・マクドナルド、イヌを育てるバチガルピ、電気羊のディック、あるいは牡蠣でいっばいのアヴラム・デイヴィッドソンで、めでたく『椋鳩十勇士』結成！」

「なんか無理矢理やなあ。まあ、キャラのたつた動物たち、アンファンテリブルなガキども、秘密結社、世界の謎、超常現象、預言者、特別な日、海と海賊、プレスター・ジョンの王国、ユートピアとディストピア、空の浮島、腸卜、暗殺者、熊の伝承、おどけマシン、ゴースト、不純粋科学研究所、歴史の裏木戸などなど、ありとあらゆるラファティ・キーワードが散りばめられ、流血と殺人と暴力とゼツキョーが横溢するけどあんまり痛そうじゃない。ラファティ爺さんがいつも以上にあちこち脱線しながら縦横無尽に語る騙る語るっ！そしてラストのエピローグならぬエピローグで明かされる驚愕の真実とは！いやあ、ラファティアン・サマーを締めくくるのに相応しい逸品ですなあ」

「ほな、またねー」

翻訳ミリタリSFのススメ

細井 威男

早いものでSFマガジンの海外SFレビュー欄担当になってから、約二年半になった。本業があまりにも多忙で、正直なところ、そろそろしんどくなってきている。しかし、本欄を担当していないとおそらく読まないであろうミリタリSFやパラノーマル・ロマンズなどに意外な拾いものがあり、その点が惜しいこともあつて続けている。せつかなので、この際、簡単ではあるがここ二年の間に日本で紹介されているミリタリSFの概況を紹介したい（なお、誌面と気力の関係上ハヤカワ文庫SFから刊行されているものに限った）。

まず、第一のオススメはジャック・キャンベルの出世作『彷徨える艦隊』（月岡小穂訳）。宇宙を二分する星間国家間で百年にわたる戦争が続く未来、艦隊は敵中心星系への奇襲攻撃を企てたものの、それは敵国の罠だった。将官が戦死し、最先任士官として指揮官を引き継ぐことになったギアリー大佐。戦争初期に味方を助け、冷凍ボツドで百年間漂流しているところを助けられたばかりのかれは、その間、軍神として崇められているのだった。崩壊した艦隊をかれは味方星系へ脱出させることができるのだろうか。というストーリー。

本シリーズのキモは、宇宙ならではの艦隊戦描写。光速の制約と相対論的效果を受ける中、三次元的に展開する戦闘はハードSFファンも唸らせるほどに緻密。主人公の序盤の快進撃も、両軍とも百年にわたる戦争で、軍人の人的資源が枯渇してしまつたがために、戦術もへったくれもなく突撃あるのみとなったという一応の理由もあり、それなりに整合性がとれている。また、軍神として奉られながらも、単なる人間であるギアリー大佐の苦悩も読み応えがある。ただ、第二シリーズの七巻（以降）は蛇足か。また、キャンベルは『彷徨える艦隊』からペンネームを変えており、もともと『デビュー時のペンネームはジョン・G・ヘムリイである。デビュー作『月面の聖戦』『月岡小穂訳』日本ではジャック・キャンベル名義』はアメリカが地球上の覇権を確立した近未来を背景に、他国が足場を固めはじめた月をも手中に入れるべく、派遣された軍の下士官

を主人公に据えた長篇。軍と一般市民が全く分離し、将校は戦争そっちのけで上層部の顔色伺いに精を出しているという構図のもと、月面での苦闘とそしてその帰結としての反乱を第一部で、そして凶ならずも指揮官となったかれの苦闘と地球からの刺客を第二部で描く。第一部は反乱に説得力を持たせるために、どう考えても作戦が筒抜けになる愚策の戦闘現場のリアルタイムカメラ中継や牟田口廉也クラスの愚将によるトンデモ作戦（精神力で兵力三倍！）など、地球上の覇権が疑わしくなるほどにちよつとどうかと思う都合の良い展開が連発されていたが、第二部は一般人を交えた政治劇など複合的に展開しており、安定して読める作品に仕上がっている。ミリタリSF初心者はジャック・キャンベルをまず読もう。

次なるオススメは、マイク・シェパード『クリス・ロングナイフ』（中原尚哉訳）。新任士官にして、星間国家の（はねっかえりの）プリンセスが対立する国家の奸計に、その知力、権力と財力で立ち向かう宇宙版富豪刑事。延々と泥濘にまみれた地上戦が続く第一巻『新任少尉、出撃！』は、中篇を連ねたようなメリハリのないストーリー展開と地味な展開で退屈極まりない。しかし、二巻目『救出ミッション、始動！』からは、着付けからテロリスト鎮圧までなんでもこなす武闘派万能メイドなど、脇を固める彩り豊かなキャラクターと起伏に満ちたストーリーテリングで、一気に読ませるエンターテインメント作品に大化けした。なお、マイク・シェパードも改名組作家。もともとはマイク・モスコウの名で活動しており、ノヴェレット“A Day's Work On the Moon”で二〇〇一年度ネビュラ賞候補に挙げたこともある中堅。

オススメの三つ目はタニア・ハフ『栄光の（連邦）宙兵隊 ミッション1 異星使節団を守護せよ』（中村仁美訳）。成熟した平和的種族で構成される星間国家（連邦）は好戦的な異星人から攻撃を受けたため、本来（連邦）に加入するには成熟度の足りない人類を含む戦闘的な種族を加入させていた。新たな種族シルスヴィス族を加入させるべく、母星に赴く（連邦）外交官を警護する任務を受けたトリン・カー軍曹。本来は戦闘もない楽な任務だったのだが、かれらの乗るシャトルが撃墜され、激しい戦闘に巻き込まれてしまったのだ。

実戦部隊の中間管理職としての軍曹の役割がクローズアップされた本作。多民族からなる個性豊かな兵卒をまとめ、経験の浅い士官を補佐するトリン軍曹のプロフェッ

シヨナルとしての姿が十全に描かれている。また、戦闘面では全く役に立たない（連邦）の外交官たちの牧歌的な姿（まるで竹本泉の作品のようだ）と、大軍を敵に回すハードな戦闘の切り替え方も見事。続刊が刊行されないのはもったいない佳作。

さて、これからはそれ以外の作品を紹介していこう。

『デイヴィッド・ウェーバー』『オペレーション・アーク』（矢口悟訳）は《セーフホルド戦史》第一部。宇宙SFと見せかけて、帆船小説＋『導きの星』に帰着するという豪腕が楽しい長篇。オーバーテクノロジーだけでは、登場人物全ての運命を変えることができないという限界を見せている点は上手い。そして、ベテランの著者だけあって全三巻の長丁場を安定して読ませる手腕はさすが。そつがなさすぎ、フックに欠ける点が惜しい。

『ステイヴン・L・ケント』《共和国の戦士》（嶋田洋一訳）は合衆国憲法とプラトニ主義に基づく統合政体（UA）が支配する二六世紀が舞台。この社会では戦闘階級の兵卒は全てクローンで構成されるが、その中でただ一人普通人として育った主人公ハリスは砂漠惑星ゴビに赴任する。だが、かれの本来の姿は最強の戦闘クローン（ヘリベレーター）だったのだ。銀河をまたにかけるハリスの活躍はいかに。

設定は強引で、ストーリーもやや平板だが、アメリカ合衆国への皮肉の効かせ方はなかなか上手く、最強にしては割と情けない目に逢いつづけ、そして苦惱するハリスの姿もなかなか楽しめる。なお、本作では日本人の未裔国家が重要な役割で登場するが、日ごろは礼儀正しいものの、宴会で酒に酔うとセクハラおやじ軍団に変貌する。このようなある意味正しい日本人描写も見逃せない。

『グレアム・シャープ・ポール』『若き少尉の初陣』（金子浩訳）は《若獅子ヘルフォート戦史》の第一作。カルト宗教を母体とする国家によって拉致され、テラフォーミング作業に従事させられた客船の乗客・船員を救助すべく、偵察艦に登場する新任少尉が奮闘するというストーリー。元海軍士官の著者だけあって、軍隊生活の描写は光る。しかしながら、地味であることに加えて、敵方の国家があまりにもバカで、展開が安易な点は疑問が残る。

知性レベルがぐっと下がる作品を紹介。

『マイク・レズニック』『スターシップ』1・2（月岡小穂訳）は、ミリタリSFとスペー

ス・オペラとの境界作。ストーリーはいきあたりばったりでデタラメな話。キャラクターの魅力にも乏しい。『キリンヤガ』（内田昌之訳）を期待するとハズレ（というよりレズニックの長篇での本分はこの路線）。

『B・V・ラース』『スターフォース 最強の軍団、誕生！』（中原尚哉訳）は、インディーズ電子出版からスタートした著者によるミリタリSF。ある夜、突然家族と共に宇宙船に拉致された主人公の大学教授は宇宙船の人工知能によるテストを受ける。それは、地球を侵略しようとする他の宇宙人に対抗するための指揮官を選抜するテストだった……というストーリー。キャラクターは書き割りで作中の人工知能とほとんど見分けがつかないほど薄っぺらい（何しろ、主人公からして子どもが死んでしまったのにもかかわらず1ページもたてば、教え子になるはずだった女子大生に欲情するのだ）。その上、大学教授であるはずの主人公を含めて、どいつもこいつもちよつとどうかと思ふぐらいに欠けており、相当頭が痛い。とはいえ、比較的短く、事件に巻き込まれてからのスピード感はなかなかのもの。加えて、ラストの超展開もその是非はともかく驚愕。頭を空っぽにして読めばそれなりに楽しめる作品だ。

さて、知性に欠けるミリタリSFの極北のような作品を最後に挙げよう。ジョン・リンゴ『《ボスリオン・ウォー》』（月岡小穂訳）は、膨大な数で地球侵略を進めるケンタウロス型異星人に対する地球人の戦いを描いた作品。今回紹介した作品の中ではもっとも知性に欠ける作品。何しろ、ラースと同様かそれ以上に登場人物のどいつもこいつも頭が悪く、まともな作戦すら練ることのできない連中。そのうえ、主人公がコンバット・スーツ開発に携わる理由も兼業SF作家だからという願望充足の塊みもないものでなかなか頭が痛い。また大気圏中で亜光速まで加速するレーザーガンなど、「ぼくのかんがえた超兵器」つぷりもあせんとさせられるほどのすばらしい。これで『スターフォース』のように短ければともかく、第一部の『開戦前夜』は上下巻、第二部の『地球戦線』に至っては四分冊と長く、水増ししたような間延びした展開が続く。とはいえ、弾数と人海戦術の麻薬的な過剰さにより、戦闘シーンがそれなりには迫力ある点が救い。

このように数々のミリタリSFを紹介した。一見同じような作品に見えるかもしれないが、それぞれ出来、特色が異なり、食わず嫌いしているともったいない作品もある。興味があれば、一読いただきたい。

むいむいのブリッツェン・ベリ伝 Ray Bradbury Uncensored!

牧 眞司

SFMのブラッドベリ特集のため、いろいろと調べものをしていく。ひびきの作家なので、関連書は(カタイ評論系のは別にして)だいたい揃えてあるのだが、ちよこちよこつまんだだけでしつかりとは読んでいない。せっかくの機会なので *Ray Bradbury Uncensored!* を通読してみた。

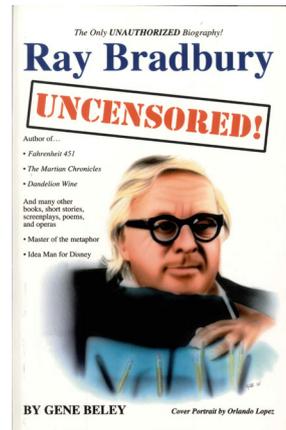
『レイ・ブラッドベリ未検閲!』とは、じつにキャッチーな表題。書影をご覧ください。ばおわかりのとおり、野囲みで *Uncensored!*。しかも赤字で印刷されている。ちよこちよこ傾いたレイアウトは、スタンブをばんつと押したかんじだ。

未検閲とはなんぞ?

著者のジョン・ベリーは年季の入ったブラッドベリ・ファンにして、ジャーナリズムの世界でのキャリアもあり、かねてよりブラッドベリの伝記を計画していた。ブラッドベリ自身とも交遊があり、「書かせてくださいよ」と何度も打診したそう。しかし、そのたびごとにかわされてしまった。ベリーさんにとつて衝撃だったのは、サム・ウェラーがブラッドベリ公認の伝記『ブラッドベリ年代記』を準備しているという知らせだ。そりゃないぜと思つたらう。オレがずっと前からやりたいやうに言っていたのに。

諦めきれないベリーさんは、サム・ウェラーの仕事はそれとして、自分なりのブラッドベリ伝をかたちにした。その想いをせつせつとブラッドベリに伝えた。しかし、ご本尊は首を縦にふらない。じゃあいいです、勝手に出します、非公認でも良いです。そんな不憫な決意に対して、ブラッドベリは「おいおい、それはちよこちよこくないんじゃないかね」と言つたのだが、ベリーさんは『華氏451度』をお書きになったあなたが、まさか、他人の著作活動に横槍を入れたりはしませんよね」と引きさがらない。これが未検閲のいきさつだ。

未検閲というと、さぞかし公認伝記には書けないヤバネタやキツイ表現があるかと期待するが、それほどでもない。ベリーさんはあくまでブラッドベリ愛のひとでした。とは言え、



公認伝記ではちよこちよこ気を遣わなければならぬエピソードや、関係者からの率直な証言もまごつている。たとえば、ブラッドベリがある講演でぐだぐだになった様子だ。

問題の講演は、サンタ・バーバラ・シティ・カレッジが後援する「精神と超精神」シリーズの一環として、一九八二年一月四日におこなわれた。ブラッドベリはスピーチの名手として知られており、このときも出だしは良かった。『ローズマリーの赤ちゃん』って映画はバカげているね。ぼくだつたらもつと良い結末がつけられる。あの赤ちゃんを抱えてカトリック教会へ駆けこみ、『神よ、あなたの子を返します!』と言っただ。ルシファーはもともと神の子だからね』などと、聴衆の関心を引きつける話題と託術で喝采を浴びていた。調子がはずれたしたのは、司会者の「精神的革命」についての質問に答えてからだ。

ブラッドベリは「もし一九二〇年ならば、ここに集まっていた人の半分は死んでいる。死がそこいらにあつた。しかし、いまはそれが変わった。それこそが革命だ」と言いだした。聴衆のなかから「それって精神的革命ですか?」と質問が出ると、「君は生きているじゃないか。それが革命だよ!」。司会者がフォローしようとするが、埒が明かない。ブラッドベリはかまわずに「じゃあ、詩を読みます」と、なんだかもう聴衆の反応などどうでも良くなつている。あとでわかつたことだが、主催者側の手はずが悪かつたせい、ブラッドベリは会場到着から講演までの余裕がなく、会食で出された酒に酔つたまま登壇したのだという。

楽屋裏はともかくとして、講演の様子は録音されており、ジョン・ベリーはそれに基ついて当日の雰囲気再現している。さらに当日の司会者にも追加取材をし、聴衆のなかにいた年輩の女性からの証言も得ている。この女性は講演会のあと、ブラッドベリ本人に手紙を書き、自分が残念に感じたことを訴えた。それに対して、ブラッドベリは返事を書いて謝罪している。立派なひとだ。その書簡も本書のなかで引用されている。

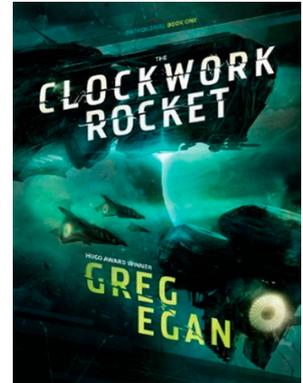
非公認ながらもジョン・ベリーのブラッドベリ伝記が態をなしているのは、こうした一次資料がうまく織りこまれていくからだ。ぼくはこの本を読んで知つたのだが、公の場でなされた講演には、著作権がないのだという。厳密に言えばいろいろややこしうだが、判例などによるかぎり、再録しても法にふれることはないらしい。

ジョン・ベリー自身がブラッドベリのファンになつたのも、彼の講演を聞いたのがきっかけだ。ブラッドベリの言葉「自分の愛に従え! 他人の意見など」それが配偶者の意見であつても——耳を貸すな!」に感銘を受けたという。それを支えに、ベリーさんは本書を書いたわけだ。他人の意見などに——それが当のブラッドベリのそれであつても——耳を貸さず。

絵解き相対論入門：The Clockwork Rocket グレグ・イーガン

板倉 充洋

イーガンの最新長篇 *The Clockwork Rocket* は、われわれの世界と時空の性質が少しだけ違う世界を舞台にした三部作の第一作である。「少しだけ」というのは数式の上での話で、その物理的帰結は非常にドラスティックな違いとなって現れる。我々の世界では、時空間内の二つの点の距離が $X^2+Y^2+Z^2-(CT)^2$ で表わされるのに対し、あちらの世界では $X^2+Y^2+Z^2+(CT)^2$ となる。時間と空間が完全に等価な世界になるので、光速を超えた移動やタイムトラベルが可能になってしまうのが一番大きな点。そこまで高エネルギー領域に行かなくても、光と化学エネルギーの関係がこちらの世界と逆になり、核反応のようなことが日常で容易に起こりうるようになってしまう。物理学者はそこで「ダメだこりゃ」と思いそれ以上この世界について調べるのをやめてしまうが、SFならば面白い現象だけを扱って、あとは適当に取り繕ってしまえばいい。光合成や代謝など生活に密着した様々な現象がこちらとアベコベになっている世界が描かれているが、これらは全て数式の符号を一つだけ変えたことの帰結である。



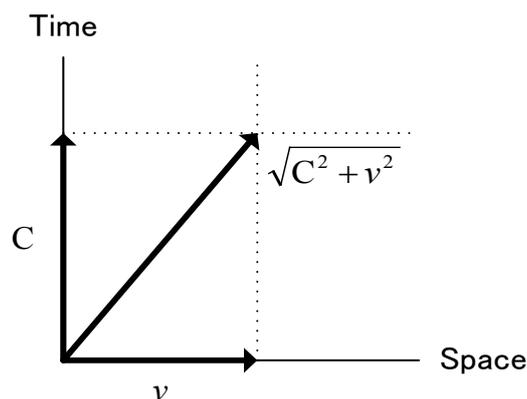
(NightShadeBooks 版表紙)

もう一つ大きな違いは、相対性理論がすべて図で説明できてしまうことである。時間と空間が等価な世界では、ウラシマ効果などの元になる相対論のローレンツ変換が単なる座標の回転で表せてしまい、実際この世界の相対論は作中で「回転物理学」と呼ばれている。この世界の知的生物は、念じることで腹の表面にどんな複雑な図形も描き出すことができるという便利な設定のおかげで、「回転物理学」が適切な図を使って作中で図を見るだけで理解できるようになっている。

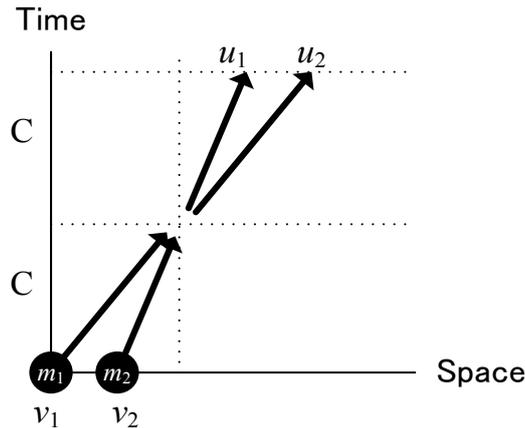
下の図は静止している観測者と速度 v で移動する観測者の世界線をあらわしている。静止している観測者は時間 1 の間に時間方向に定数 C だけ移動するものとする。この観測者から見て速度 v で移動する点は、時間 1 の間に空間方向に距離 v 、時間方向に距離 C だけ移動する。一方、移動している観測者の主観時間はこの矢印の長さに比例して静止している観測者の主観時間より長くなり、静止している観測者の矢印が長さ C であるのに対して $\sqrt{C^2+v^2}$ となり（三平方の定理）、時間の経過が $\sqrt{1+\left(\frac{v}{C}\right)^2}$ 倍となる。これは我々の世界のウラシマ効果、

$\sqrt{1-\left(\frac{v}{C}\right)^2}$ と似ているが効果が逆になり、運動するほうが長い時間が経過することになる。このように、相対性理

論に出てくる様々な数式が図を描くだけで簡単に出てくる（しかし符号は逆）というのがこの世界の面白い点である。こちらの宇宙の大学の物理学科で、本当の相対論を教える前に回転物理学を教えたらいいんじゃないか、とわりと本気で思っている。



もう一つ例を示そう。下の図は質量 m_1, m_2 で速度 v_1, v_2 の物体が衝突し、速度 u_1, u_2 に変化する過程を示している。



古典的な（非相対論的）運動量保存則は $m_1 v_1 + m_2 v_2 = m_1 u_1 + m_2 u_2$ で、エネルギー保存則は $\frac{1}{2} m_1 v_1^2 + \frac{1}{2} m_2 v_2^2 = \frac{1}{2} m_1 u_1^2 + \frac{1}{2} m_2 u_2^2$ となる。

一方、この現象を真横に向かって時間が進行している観測者、つまり時間と空間が逆転した座標系で観測するとどうなるだろうか。この世界では速度の上限は存在せず、ひたすら加速することで時間軸を90度真横に向けることができるので、そういう観測者から見て古典的な物理学は破たんする。実際、元の座標系で速度 v で運動する物体は、90度回転した座標系では時間方向に v 進む間に空間方向に C だけ進む。この間に観測者の時間は v/C だけ経過するので、この観測者から見た速度は距離÷時間 = $C/(v/C) = C^2/v$ となる。したがってこの観測者から見た運動量保存則は $m_1 C^2/v_1 + m_2 C^2/v_2 = m_1 C^2/u_1 + m_2 C^2/u_2$ となり、一方の観測者から見て運動量が保存していても、他方では保存するとは限らなくなる。エネルギー保存則も同様。

ここで、もっといろいろな観測者から見て同じに見えるような量を考えてみる。たとえば速度を表すのに、特定の座標系での量でなく運動の矢印の向きそのものを使うことを考える。ベクトルは長さを持つ量であるから、向きを指定するには長さが一定になるように揃えればいい。たとえば長さを C になるようにしてみよう。元の座標系で速度 v で運動する物体の世界線の向きは、 $(vC/\sqrt{C^2+v^2}, C/\sqrt{C^2+v^2})$ というベクトルで表わされる。これを整理すると $(v/\sqrt{1+(v/C)^2}, C/\sqrt{1+(v/C)^2})$ となる。さらにこれに質量をかけたものが、時空間の中でこの物体の進む「いきおい」のようなものを表す量になりそうである。

$$(mv/\sqrt{1+(v/C)^2}, mC/\sqrt{1+(v/C)^2})$$

試しに、上の式の v を真横に進む観測者から見た速度 C^2/v で置き換えてみよう。するとうまいことに第一成分と第二成分が入れ替わったものが出てくる。実は上の式の第一成分が相対論的運動量、第二成分が相対論的エネルギーになっている。この定義を使えば運動量保存とエネルギー保存は観測者の座標によらないものになる。

相対論的運動量 $mv/\sqrt{1+(v/C)^2}$ は、速度 $v \times$ 質量 $m/\sqrt{1+(v/C)^2}$ 、と解釈することができる。すなわち速度が増すことによって質量が $1/\sqrt{1+(v/C)^2}$ 倍に減少する、ということを示している。これは我々の世界の $1/\sqrt{1-(v/C)^2}$ に相当する。我々の世界では速度が C に近づくにつれて質量が無限に大きくなるのでそれ以上加速ができないことになるが、あちらの世界では加速するほど質量が軽くなり、いくらでも加速できることを示している。

相対論的エネルギーは正確には第二成分に $-C$ をかけた $-mC^2/\sqrt{1+(v/C)^2}$ となる。これは v が C より十分に小さい場合、 $-mC^2 + \frac{1}{2} mv^2$ と近似でき、質量エネルギー + 運動エネルギーになる。また相対論的質量 $M = m/\sqrt{1+(v/C)^2}$ を使えば、 $E = -MC^2$ と表せる。このマイナス符号が曲者で、核反応のような危ない現象がいつも簡単に起きてしまうことを示唆している。

こうした数学・物理の詳細はこの作品を楽しんで読むためには実は全く必要がなく、異世界ハードSFとして純粹に楽しめる作品になっている。しかし腕にちょっと覚えのある人間にとっては、紙と鉛筆で計算を始めずにはおれない刺激に満ちた作品である。

編集後記

いやはや、久方ぶりの会誌です。もともと八月刊行の予定で考えていたのですが、本業がいつにも増して多忙で、大幅に遅れてしまいました。寄稿者の方々にはもうしわけありません。

さて、SFマガジンの執筆者近況にもちよつとだけ書きましたが、外部研修でバンコクに一週間ほど行ってきました。東南アジアの街はたいがいそうですが、近代的な部分とぼろい部分の格差が衝撃的でした（何しろ、日本なら丸の内に相当するオフィス街の横にトタン屋根の平屋が広がっているんですよ。バチガルビが『ねじまき少女』の舞台にここを選んだのにも納得です。

次の号は今回ほど間を広げず出していきたいですが、ここは原稿の集まりと編集人のやる気と時間の余裕次第なのでどうとも言えません。

本誌記載の内容について、おたより・ご意見のある方は hosoi@bakasf.info まで。なお、お便りは本誌に掲載する可能性もございません（その時はご一報入れます）。よろしくお願ひします。

アンサンブルのご案内

アンサンブルは二〇〇〇年一月二月に海外SFに関する情報交換を目的に、作られたファングループです。

現在の主な活動はメーリングリストによる情報交換と東京・関西での月一回の例会です（東京：原則第四土曜日、関西：不定期）。例会に参加されたい方は編集人の細井威男までメール、あるいは近くの会員までご一報ください。

Void Which Binds 復刊 1 号

2012 年 9 月 30 日発行

編集担当：細井威男 (hosoi@bakasf.info)

発行：海外 S F 同好会「アンサンブル」

Void Which Binds

復刊 Vol.1